

2018 年度 言語文化研究会主催講演会報告

2018 年度は、教員が企画した 5 回の講演会を行った。以下に、時系列に沿って、それぞれの担当教員からの報告を載せる。

題名：「これからの外国語学習と指導：動機付けと内容重視」

日時：2018 年 5 月 1 日（火）10 時 55 分～12 時 25 分

会場：東京女子大学 243401 教室

講師：原田哲男氏（早稲田大学教授）

〈概要〉今回はご著書『英語で教科内容や専門を学ぶ：内容重視指導（CBI）、内容言語統合学習（CLIL）と英語による専門科目の指導（EMI）の視点から』を 2014 年に出版される等、言語が伝える内容を重視した外国語学習・指導の研究者として国内外で活躍されている原田先生を講師としてお迎えした。ご講演では、第二言語習得の研究成果や早稲田大学での授業実践の具体例等も織り交ぜながら、英語を含む外国語の学習と動機づけの関係に始まり、これからの外国語教育として、教科内容や専門を英語等の外国語で学ぶ新しい指導方法に至るまで詳しく説明していただいた。参加した学生達は、外国語を教える時のみでなく、外国語を学ぶ時にも有益な新しい視点を得ることができたのではないだろうか。（森 博英）

題名：「日本語教育の現場—難民の自立を日本語教育で支える—」

日時：2018 年 5 月 18 日（金）16 時 35 分～18 時 5 分

会場：東京女子大学 9103 教室

講師：矢崎理恵氏（社会福祉法人さほうと 21 学習支援室コーディネーター）

〈概要〉東京都品川区に本部をもつ「さほうと 21」において学習支援室コーディネーターとして生活者としての外国人に対する様々な日本語学習支援に取り組んでいる矢崎氏をお招きし、日本語教育を受けることで外国につながる人々がどのように変化し、社会で活躍をしているか、また、どのような困難が存在しているのかを複数の事例をもとに紹介していただいた。

以下、矢崎氏が講演の最後にくださったメッセージである：「教える」でもなく、

「寄り添う」でもなく、ご縁のあった外国出身者の「たまたまのご近所さん」として、共に悩んだり怒ったり笑ったりしながら、心ある「伴走者」でありたい。大切なのは、「続けること」、そして最後の最後まで「期待すること」。(松尾 慎)

題名: "Arrietty Comes Home"

日時: 2018年6月2日(金) 10時55分~12時25分

会場: 東京女子大学 24202 教室

講師: キャサリン・バトラー博士 (英国 カーディフ大学上級講師)

〈概要〉英国の児童文学者で、英日の文化翻訳研究がご専門のバトラー先生が来日中の機会を活かして、講演をお願いした。原作 (*The Borrowers*) とスタジオ・ジブリアニメ「借りぐらしのアリエット」の英語字幕2種類との比較の結果見られた問題について、講じていただいた。

写真や動画を多く見せながらお話いただいたおかげで、英語での講演であったにも関わらず、満席で、学生たちが身を乗り出して聞いているのが印象的であった。(田中美保子)



題名: 「日本語教育初級クラスの実際」

日時: 2018年10月26日(金) 16時35分~18時5分

会場: 東京女子大学 9103 教室

講師: 金子史朗氏 (友国際文化学院教務主任)

〈概要〉日本語学校で大学や専門学校に入学することを目指している留学生に対する日本語教育に長く携わっている金子氏をお迎えした。日本語教育初級クラスの実際を知るために模擬授業を行っていただいた。模擬授業においては、本学学生を初級の日本語学習者に見立て、文型項目の導入、基本練習や簡単な応用練習の流れを見せていただいた。周到な準備と経験に裏付けられた授業展開を参加者一同、体験した。金子氏には2012年度から7年連続で模擬授業と講演をお願いしているが、何年か連続での参加者も多かった。また、模擬授業後には質疑応答を行い参加学生からいくつかの質問が出され、金子氏は丁寧な回答をしてくださった。授業後も金子氏への質問が相次いでいた。(松尾 慎)

題名：「日本語教育の教室からみた第二言語習得」

日時：2018 年 11 月 20 日（火）10 時 55 分～12 時 25 分

会場：東京女子大学 24301 教室

講師：大関浩美氏（麗澤大学准教授）

〈概要〉講師の大関浩美先生のご専門は日本語教育における第二言語習得であり、ご著書の『日本語を教えるための第二言語習得論入門』は日本語教師に向けて第二言語習得の研究をわかりやすく紹介した良書として日本語教育関係者に広く読まれている本である。今回のご講演では、第二言語習得研究での基本的な事柄が日本語教育の現場とどう関わるのかをご紹介していただき、日本語学習者がどのような中間言語を作るのか、どのような母語の影響があるのか、習得が難しい言語項目にはどのようなものがあり、それはなぜなのかといった点について実例を挙げながら解説していただいた。特に日本語教育課程の学生には、第二言語習得研究を日本語教育の現場にどのように活かすかを考える貴重な機会であったと言えるだろう。（森 博英）